

## あいさつ

豊田市矢作川研究所 会長

鈴木 公平 (豊田市助役)

早いもので、平成6年7月に豊田市矢作川研究所が発足し、ここに所報の第3号を発刊することができました。これも偏に、ご協力を賜った共同研究員の皆様、地元の調査会や愛護会の皆様、そしてご指導、ご配慮を賜った国、県等の関係機関の皆様のお陰であり、心から御礼申し上げます。

さて、時代は21世紀を目前にして、地球環境問題や荒れる子どもたちの心の問題がクローズアップされています。環境問題は、大きく水と大気と光の問題に整理できると思いますが、いずれも人為によるものです。その問題の深刻化は、人類の経済規模の拡大と経済論理という、謂わば単一指標の優先化に比例しているような気がします。

子どもたちの心の問題も、実は社会的価値観の単調化につれて深刻化してきているように思います。つまり、環境問題も子どもたちの心の問題も共に社会の構造的単調化、あるいは多様性の喪失に起因しているのではないかと思います。

大自然に接するとき、人はその安定感や美しさ、そして安らぎを感じますが、それは人がまぎれもなく大自然の一員だからだと考えられます。一般に、自然のなかでは種の多様性が自然生態系の安定性を担保し、それがバランスの美や安らぎ感に通じると考えられますが、安定性に寄与する要素は、実は構造的な生息環境の多様性であり、それが種の多様性を実現しているのではないかと思います。

子どもたちの心の問題も、同じことが言えると感じています。子どもたちの多様な個性を受けとめ理解してあげられる社会的環境、謂わば子どもたちが安心できる心のすみ家の喪失が心の荒れになっていると思います。心のすみ家とは、子どもたちを見守る大人自身が多様性原理を理解し、大切にしている社会ではないかと思います。まさに、自然そのものが人にとっての究極の教師ではないかと思います。従って、身近に自然生態系の回復保全を図り、学習機能を整えることが都市政策として必要性を増していると考えます。

経済優先という社会的な価値構造は簡単には軌道修正できないと思いますが、地球環境問題は身体的健康だけでなく、心の健康問題にも通じていると感じています。

昔から、人は川に依存して生活してきました。それは、今後も基本的には変わらないものだと思います。そして、川は大気からの雨が地表に降り注ぎ、すべてを洗って流れ続けます。川の傷みをそのまま人の傷みと感じ、これからも川の研究を通して社会のあり方を考え続けていきたいと願っています。